

網走水産試験場の今・昔

網走水産試験場は、去る4月に機構改正により資源管理部と資源増殖部が一つとなり、調査研究部が発足し、紋別支場が加工利用部となりました。

網走水産試験場が昭和17年に前身である「網走水産指導所」として開設以来、64年が経過しました。今回は、当水産試験場が歩んできた歴史を簡単にご紹介致します。

網走水産試験場の昔

組織体制及び庁舎の沿革

網走支場（現本場）

当水試は、昭和17年10月に現在の網走市役所と網走川との間付近に、前身である「網走水産指導所」として仮庁舎が開設されました。その後、昭和25年11月にオホーツク海を望む北11条東1丁目に北海道立水産試験場「網走支場」が建設され、昭和39年に「網走水産試験場」に改称されました。この庁舎は、昭和41年1月に現在の鱒浦1丁目に現庁舎が新築されるまで利用していました。

紋別分場（現加工利用部）

昭和25年8月に紋別市に「水産指導所」として開設され、同年12月に「紋別分場」に改称されました。更に昭和57年4月に網走水産試験場「紋別支場」に改称されました。

サロマ分場（北海道サロマ海藻類人工採苗場併設）

昭和40年11月には、常呂町（現北見市常呂町）栄浦に海草類（ノリ、ワカメ）及び貝類（カキ、ホタテガイ）、魚類の増養殖技術の試験研究を行うため、開所されました。昭和56年1月に当分場は廃止され、建物は現在サロマ湖養殖漁業協同組合となっています。

当時の試験研究内容（昭和30年代から40年代）

当時より現在も引き続き行われている主要魚種であるカレイ類、ケガニ、ホタテガイの調査研究や現在行っていないエビ類やタラバガニの資源調査等が実施されていました。

更には、サロマ分場において、海草類の増養殖技術の調査研究が行われていました。

加工利用関係ではケガニやホタテガイの加工利用に関する調査研究が行われ、珍しいところでは、厚岸湖からサロマ湖に移植されたエゴノリを利用した寒天の加工利用研究が行われていました。



昭和23年当時の支場（本場）庁舎
（北水試百周年記念誌より）



昭和26年当時の紋別分場庁舎
（北水試百周年記念誌より）



昭和40年当時のサロマ分場庁舎
（北水試百周年記念誌より）



水質測定調査（サロマ湖）



水質測定調査（サロマ湖）



網走支場加工場で行われた「エゴノリ寒天企業化試験」風景

写真左：心太（トコテ）突き作業

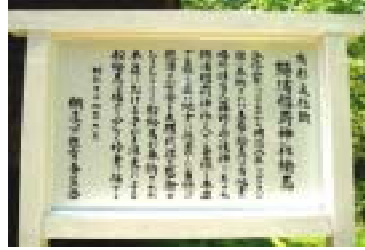


写真右：アルカリ処理藻の洗浄

鱒浦(所在地)の由来

鱒浦の由来はこの付近が昔からアイヌの人々にとって、鱒の好漁場となっていたことからアイヌ語の「イチャヌニ」(鮭の産卵場)と呼ばれていたことが起源とされています。

なお、当水試の近くに所在する「鱒浦稻荷神社」には、市の文化財に指定されている海上の安全祈願と大漁成就の感謝の印として「船絵馬」が奉納されています。



網走水産試験場の今

現在の網走水産試験場は、先に述べたように去る4月の機構改正により企画総務部と調査研究部・加工利用部の3部体制となりました。

当網走水産試験場は、全国一の漁業生産を誇る北海道の中でも500億円産業を形成しているホタテガイに関する漁業について、本道の研究拠点として、ホタテガイの生産から利用・廃棄物の処理利用までの一環した試験研究を全道を対象に行っています。

また、地域に密着した産業研究機関として、貝毒プランクトンのモニタリング、ケガニ、キチジ、カレイ類等の資源管理、水産物の高度利用や衛生管理等オホーツク圏の各種課題に取り組んでいます。

最後に先人の研究者の方々が残していただいた調査研究の実績の労を敬い、今後更に一層、オホーツク圏の水産業の発展に努めてまいります。



現在の本場庁舎全景
(建設当時と殆ど変わっていません)



建設当時(昭和40年)本場庁舎全景
(北水試百周年記念誌より)



現在の加工利用部(紋別市)

現在の試験研究内容



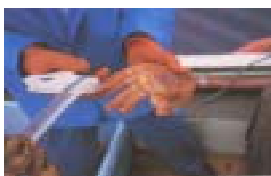
ホタテガイの測定



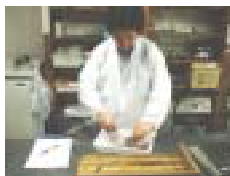
ホタテガイの解剖写真



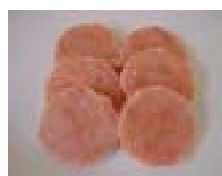
能取湖における海洋観測調査



ケガニの標識放流



キチジ(キンキ)の測定



サケ・マス肉を用いた
ハム様食品
(平成15年2月特許取得)



ホタテガイ黒膜除去(特許出願中)
左:無処理 右:黒膜処理後